オリオン座の星座神話の謎

明石市立天文科学館　館長　井上毅

はじめに

オリオン座に魅了される人は多いだろう。２つの一等星。一列に並んだ三ツ星。オリオン大星雲。肉眼から望遠鏡まで（可視光以外の波長でも）天文の魅力が最大限に詰まった星座だ。しかしオリオン座の神話は全くさえない。

星座神話はプラネタリウムでは人気のあるテーマである。特に英雄が登場する神話は子どもたちにも聞かせやすいためよく紹介される。春から初夏にかけてのヘルクレスの物語や秋のエチオピア王家の物語などは定番である。比べてオリオンはどうか。

傲慢さゆえ神の怒りを買いサソリの毒針に倒れる、美しいプレアデス姉妹に惚れて彼女らを追いかける野蛮な男、乱暴した報いで毒を盛られ失明する、月の女神アルテミスと恋仲になるも太陽神アポロンの謀略によりアルテミスに矢で撃たれ命を落とすなど。自業自得とはいえ悲劇のオンパレードである。仲間といえば二匹の犬がいるが特に物語は知られていない。一説では、オリオンは、ある神の放尿後の地面から誕生したそうで、オリオンとは「尿」の意味である、という説すらある。

なぜオリオン座の神話は、星座の輝きと比較してさえないのだろう。私はプラネタリウムの解説を行うようになって以来、気になっていた。いろんな文献に目を通しているうちに、自分なりに納得するところがあったので、紹介する。

オリオン ・ペルセウス・ヘルクレスの比較

オリオン座の神話について考えるために、ペルセウス座とヘルクレス座との比較をおこなってみる。

（１）星の比較

まず星座の輝きを比較する。それぞれの星座に含まれる等級ごとの恒星の数は表―１の通りである。オリオン座が圧勝。次いでペルセウス。ヘルクレスは２等星がひとつもなく、都会では見つけることさえも難しい。

表－1　星座に含まれる等級ごとの恒星の数

星　座	0等	1等	2等	3等	4等
オリオン座	2	0	5	4	16
ペルセウス座	0	0	2	5	17
ヘルクレス座	0	0	0	7	17

天文年鑑2016年版　p290-293 より

（２）ギリシャ神話の特徴の比較

ギリシャ神話における3人の特徴を比較した。ここでは「ギリシャ・ローマ神話事典」（マイケル・グラント／ジョン・ヘイゼル著　大修館書店）を参照した。

表ー2　星座神話の特徴

星座	神話の特徴　※(　)は関係する星座等
オリオン	ポセイドンの子(異説あり)。ふるさとはクレタ島。巨人の狩人。不遜。神を怒らせる。さそりに刺される、おおいぬ、こいぬを従える、プレアデスを追いかける、月の女神アルテミスと恋物語も太陽神アポロンの謀略で絶命。天体の実際の動きや配置と神話が深く関係。(月、プレアデス、さそり、おおいぬ、こいぬ)
ペルセウス	ゼウスの子。アルゴス出身。セリポス島育ち。ゴルゴン退治の冒険の途中でアンドロメダ姫を救出。結婚。子孫繁栄。ヘルクレスはひ孫。秋の代表的な星座。神話の一場面が星座になっている。(アンドロメダ、カシオペヤ、ケフェウス、ペガスス、くじら)
ヘルクレス	ゼウスの子。アルゴス出身。不屈の勇気と忍耐力。十二の難業。ギリシャ神話最大の英雄。多くの芸術作品に登場。豪放磊落。神話が先にあり、後で星座に当てはめられたと思われる。星座神話は膨大なエピソードのごく一部。 (しし、かに、うみへび、りゅう、アルゴ、天の川)

同書は、683ページにわたる大部の事典である。そのなかで、オリオンの項目は3ページ(ｐ１８５－ｐ１８７)、ペルセウスは4ページ(ｐ４９６－ｐ４９９)であるが、ヘルクレスは24ページ(ｐ４６９－ｐ４９２)割かれている。これだけみてもヘルクレスの圧倒的な存在感をみることができる。オリオンは悪く描かれることが多い。星空での存在感とは逆転している。

(3)星座の登場年代とその記述

オリオン座、ペルセウス座、ヘルクレス座がいつから知られるようになったのだろうか。

星座の起源は約5000年前のメソポタミア地方とされる。その後紀元前5世紀ごろ地中海を交易するフェニキア人によってギリシャに星座が伝えられ、ギリシャ神話と星座が結びついた。

三人のうち最も古いのは、オリオン座である。野尻抱影「星三百六十五夜」によると、紀元前9世紀のホメロスの作品がオリオン登場の最古の文献で、「オデュッセイア」で主人公のオデュッセウスが航海に出るくだりで「オーアーリオーンの方角をみまもる」という形で出てくる。オリオンがサソリに刺されるという神話は紀元前8世紀のヘーシオドスの天文詩「アストロノミア」で初登場している。

表―3　ヘーシオドス「アストロノミア」(BC8世紀)

オーリーオーン、彼はミノース(クレタ王)とポセイドンの娘エウリアレーとの子で、波の上をさながら陸の如く歩む能力を与えられた。(中略)クレタ島で、アルテミスとレトと狩りの日々を送った。大地のあらゆる獣を殺しつくさんと言ったため、大地の神が怒り、巨大なサソリを放って彼を刺し殺した。その後、ゼウスはアルテミスとレトの願いを聞いてその男らしさゆえに彼を星々の間につらね、サソリも記念に星座にした

「星三百六十五夜」野尻抱影を参考に現代語訳

その後、フェニキア人により星座が伝えられた時期になると、オリオンがサソリに刺されたのは、アルテミスの怒りということになっている。

表—4　詩人フェレキデース（BC5世紀）

オーリーオーンがアルテミスと狩りをしていた時に、女神に挑んで衣に手を触れたため、女神が怒ってその首筋にサソリを取りつかせて刺し殺させた。それで星になってもオーリーオーンはサソリ座が東に昇れば西の果てににげる

「星三百六十五夜」野尻抱影を参考に現代語訳

　ギリシャで星座神話がさかんに語られるようになったのは紀元前3世紀ごろ。アレキサンダー大王が活躍し、ギリシャと中近東の文化が混合したヘレニズム期である。この時代では作品「ファイノメナ」が有名である。吟遊詩人アラトスによる作品で、44の星座の記述がある。その後のプトレマイオスの48星座につながるもので、星座研究では重要な文献だ。ファイノメナにおけるオリオン、ペルセウス、ヘルクレスの記述を紹介しよう。

表—5　アラトス「ファイノメナ」（BC3世紀）

オリオン座 　斜めに駆け上がる4つ足の雄牛の下方には、偉大な光を放つオリオンが輝く。雲のない晩、空高く、強烈な光芒を放ち、駆けて行く星座は他にはない。オリオンを眺めていると、それだけで他の星座の輝きは色あせてしまう。
ペルセウス座 　彼の花嫁の足元がペルセウスを見つける案内となる。ペルセウスの肩から上は永遠に夜空があり、アンドロメダはペルセウスより天頂高く輝く。彼の右手には花嫁の母カシオペアの玉座の方に延びていて、その足の前方で、まるで追いかけていくように、ゼウスの天頂を大股で移動していく。
ヘルクレス座（に相当する星座） 　ひざまづく者は重い使命に耐えている男の姿で、その姿は誰も詳しくは知らない。そこにどのように星の線を読み取るのか、そしてどのような仕事が与えられたのか。男たちは単に「ひざまづく者」と呼んだ。今、彼は片膝を着いた姿で、肩から両腕は上にあげて伸びた姿をしている。ちょうど腕をいっぱいに伸ばした大きさだ。蛇行する竜の頭上には、彼の右足先がある。

「ギリシャ星座周遊記　橋本武彦　地人書館」より

　このようにファイノメナではオリオン座は「それだけで他の星座の輝きは色あせてしまう」という最大の賛辞が送られている。ペルセウス座もすでにギリシャに根付いていることがわかる記述である。一方、ヘルクレス座はこの時点では存在していないのだ。そこにいるのは「誰かわからないひざまづく男」である。
　この男がヘルクレス座となったのは、ファイノメナよりすこし遅れて登場したカタステリスミという天文書においてである。（この書籍は謎が多く、エラトステネスの著作とされるが、それを疑う研究もあり、あえて作者を偽エラトステネスと紹介されることもある。）ここではヘルクレス座が次のように紹介されている。

表—6　エラトステネス「カタステリスミ」（BC3世紀）

ヘルクレス座 　この星座は竜を踏みつけているヘラクレスといわれている。その姿は棍棒を振り上げ、獅子の皮をまとった姿をしている。ヘラクレスが黄金のリンゴを取りに行こうとした時のこと、ヘラ女神はヘラクレスの存在が気に食わなかったので、竜を黄金リンゴの番人として遣わした。ヘラクレスはこの大きな危険をはらむ難しい仕事を成し遂げた。ゼウスはこの戦いを祈念として星々の中に見えるようにすることを選んだ。

「ギリシャ星座周遊記　橋本武彦　地人書館」より

「ヘラクレスの姿といわれている」という表現が目を引く。神話と星座が結び付いた瞬間といえるだろう。カタステリスミで紹介されるオリオン座はヘーシオドス「アストロノミア」やフェレキデースに書かれている悲劇の神話が引用されている。ヘルクレスの星座界へのデビューとは対照的である。

オリオン神話はなぜさえないのか？

以上の史実を材料として、「オリオン座の星座神話がなぜさえないのか？」について考察してみよう。

オリオンとペルセウスとヘルクレスを比較すると、父親が違うことに気づく。オリオンはポセイドン、ペルセウスとヘルクレスはゼウスが父である。ここに重要なカギが隠れているようだ。

ゼウスは、ギリシャ神話の多くの場面に出現する。ゼウスが登場する神話は紹介に苦労する。プラネタリウム解説者からは困った神だと揶揄されることが多い。

ゼウスはなぜこんなに多くの関係を持っているのか？それは、ギリシャが多神教であることに理由がある。神話というのは、歴史的な事実が混じっている。ギリシャでは多くの都市国家があり、各地に神がいた。神の血縁関係は、都市国家間の協力を意味した。最高神ゼウスは統合の象徴として君臨した。それぞれの神や英雄を信奉する人々はゼウスの子孫であることで自らの正当性を確認した。ゼウスはもっとも力を持った神であるため、多くの場所で物語の始まりとなるエピソードを持ったのだろう。

ゼウスと同格の神にはポセイドンとハデスがいる。ハデスは冥土の国つまり地下に潜っている。ハデスの一派はゼウスと協力関係にあったものの衰退し、地上での力を失っていったのかもしれない。

ポセイドンは、広大な海を支配するが、ゼウスにはすこし劣る。わかりやすいエピソードがエチオピア王家だ。カシオペヤはポセイドン一派を怒らせ、化けクジラがやってくることになった。ポセイドンのつかいともいうべき化けクジラを退治したのはゼウスの子ペルセウス。その後おとがめがないのは、ゼウスとポセイドンの力関係を暗示しているようだ。エチオピア王家の物語は地中海に暮らしたフェニキア人の物語で、やがてギリシャ神話に組み込まれていった。フェニキアとギリシャの友好な関係は、アンドロメダ姫とペルセウス王子の結婚に象徴されるといえるだろう。

アンドロメダとペルセウスの孫娘を母とし、ゼウスを父とするのがヘルクレスだ。つまりヘルクレスはペルセウスのひ孫である。多くの苦難を乗り越えた英雄ヘルクレスもまたゼウスと同様かそれ以上の統合の役割を持っていた。ギリシャを支配したドーリス人もアレキサンダー大王も自らをヘルクレスの子孫と信じ、それを権力の根拠とした。

オリオンの父はポセイドン。ふるさとはクレタ島である。この島には、紀元前15世紀のころまでクレタ文明（ミノア文明）が栄えていた。城壁のない平和な社会があった。（クレタ島には、クノッソス宮殿という遺跡がある。ギリシャ神話のミノス王の居住地で、地下の迷宮ラビリンスにミノタウロスが暮らしたという話は、この宮殿が舞台である。

その後ギリシャ人がクレタ島に進出し、ミューケナイ文明（ミケーネ文明）に置き換わった。やがてドーリス人の侵攻を経て、ギリシャ全体が混乱期を迎え、クレタ島のミューケナイ文明も消滅してしまった。神話のトロイヤ戦争が起こったのもこの時期だ。この神話は、混乱の時代を象徴している。

やがてギリシャは衰退し、暗黒時代といわれ、何があったのかよくわからない500年の空白の時代を迎える。ギリシャ人たちは、混乱、荒廃、貧困におびえながら、過去の栄光と繁栄を語ったといわれている。

歴史に再び黎明の時が訪れたのは、ホメロスの語る神話が人々の心をとらえた紀元前9世紀のころだ。先に述べたようにオリオンはホメロスの作品の中で星座として登場した。

クレタ島に関係する物語は多い。ゼウスはクレタ島で育った。ゼウスが変身したおうしは、フェニキアの王女エウロパを乗せてクレタ島に渡った。（おうし座／ヨーロッパの語源はエウロパに由来）この神話はゼウスの勢力がフェニキアとは友好関係を保ちながら、クレタ島にわたってきたことを暗示しているようだ。ゼウスの仲間である月の女神アルテミスはクレタ島で、オリオンとは立場を超えた恋愛関係にもなった。征服の過程で対立陣営を舞台とした悲劇のロマンスがあり、それが神話に反映されたのかもしれない。

橋本武彦氏は前掲書で次のように指摘している「数ある星座の中で最も見事な星座はオリオン座です（中略）本来ならばその星座の輝きに相応しい星座物語が伝えられるべきでした。けれどもミューケナイ（ギリシャ）人のクレタ島進出やギリシャ（ドーリス）人の進出とその後の暗黒時代によって、オリオンは古典時代（BC5世紀）では非主流派の神話物語に組み入れられました。彼の星座物語はあまりに軟弱な恋愛物語で脚色されてしまったことは返す返すも残念なことです。」

オリオン座はギリシャ神話成立以前の文明の名残だったのだ。

まとめ

オリオン座は、かつてクレタ島で神のような存在であった。オリオン座にも素敵な物語があった。時代が進み、神話の再構築が繰り返され、そのたびに負の圧力がかかり、オリオン座の神話はさえないものになってしまった。これが冒頭の疑問の答えである。

クレタ文明の遺跡からは未解読の文字「線文字A」が発掘されている。ここにオリオンの物語が書かれていたら、などと想像が膨らむばかりである。そろそろ、オリオンにかけられた濡れ衣をほどき、当時の物語を想起させる、星座の輝きにふさわしい星座物語が生まれてもいいと思う。もし、プラネタリウムで紹介するなら、こんなタイトルはどうだろう。

「オリオンのクレタ物語」
（最後はダジャレですみません）

★参考＆おすすめ文献

「星座の神話 - 星座史と星名の意味」　原　恵　著／ 恒星社厚生閣
※星座の歴史を知る優れた教科書。

「星三百五十六夜」　野尻抱影　著／中公文庫
※何度読み返しても発見のある名著。

「ギリシャ星座周遊記」　橋本武彦　著／地人書館
※著者はギリシャに滞在する写真家。ファイノメナ、カタステリスミが星座ごとに記載されていて重宝する。著者の経験談も大変面白い。オリオンの謎の考察も行われていて、非常に参考になった。ギリシャにはオリオンを扱った芸術作品がほとんどないという興味深い指摘も本書内でなされている。

「ギリシャ・ローマ神話事典」
マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル著／大修館書店
※神話に登場する神や人物などについて個別に非常に詳しい。歴史や神話の解説も優れている。

「星のギリシア神話」
ヴォルフガング・シャーデヴァルト著／白水社

「星百科大事典」　ロバート・バーナム・ジュニア　著／地人書館

「まんがで読む 星のギリシア神話」
藤井龍二　著／アストロアーツ
※星のギリシャ神話が大変わかりやすい。

「星の名前のはじまり」　近藤二郎　著／誠文堂新光社
※著者は考古学者で天文ファンである。著者の一連の著作は正確で新しいので勉強になる。

「神話と意味」　レヴィ・ストロース著／みすず書房
※神話の研究の大御所の講演録。

「私のギリシャ神話」　阿刀田高　著／集英社文庫
※神話の構造がわかりやすく説明されている。

「古代ギリシャがんちく図鑑」　芝崎みゆき　著／バジリコ
※厚くて熱い面白い本。イラストとエッセイ形式。複雑なギリシャの世界を俯瞰するのに役立つ。